

第3章・ゆとり教育世代の見えない学力

親のやる気 子のやる気

〇〇45



入塾してから子どもたちの成績が上がるまでには時間が必要です。しかし、多くの親の気持ちは「3カ月は待てません」ではないでしょうか。

冬休みに入り学習相談の申し込みがありました。通信簿を見て、母親はもっと頑張る

絶対・相対

ほしいと思いい、歯がゆい気持ちで訪れたようです。私は通信簿の見方から説明しました。2002年の4月、学校は完全週休2日制となりました。いわゆるゆとり教育の導入です。学校から配布される年間行事予定表は1年のうち約45%が休日。通信簿も相対評価から絶対評価へと大きく変わりました。

従来の相対評価では成績上位者から評定が

自力で入試乗り越えて

5、4、3、2、1と一定の割合でついていたので、例えばクラスの中には通信簿に5が多い友達と1と2ばかりの友達など、必ず評定5の生徒と1の生徒が存在していました。「前の学校では5だった生徒が、転校した学校では3になった」というような学校間格差の話も聞かされてきました。それが、他の生徒の成績を考慮に入らず、各教科のあらかじめ設定した到達目標に対して、どこまで到達できたかという本人の成績そのもので評価しようとする現行の絶対評価に移行し9年がた

どうしています。一人一人を正しく評価するというのは理想的な考えです。しかし、評価される子どもたちには「評価は試験だけではないようだ」ということが分かっている程度で、平常の課題提出や授業態度などがどのように評価されているかは分かっているのが現状です。

昔のオール3は今ならオール4。しかも定期テストの5教科の平均点が300点ではなく400点に近い学校もあるのです、大抵のわが子に90点以上の教科が1教科はあることになりません。逆に評定4で得点が90点の教科が中々にはありません。今年も1月には県立高校入試が

学年で成績上位の中3男子に「絶対」の対義語を聞いてみました。その子はしばらく考えてから「大体」と。私と母親は顔を合わせ「違っよ」と。さらに考えさせたら「まあまあ」「できれば」「無理」「不可能」……とうとう「相対」という答えにはたどり着きませんでした。

ゆとり教育では、親には子どもの成績が見えにくい仕組みになっていて、まさに「見えにくい学力」ですが、子どもたちには日常でありどうにもならない現実なのです。今年も1月中旬には大学入試センター試験が、3月上旬には県立高校入試が

他人なり”の頑張り必要

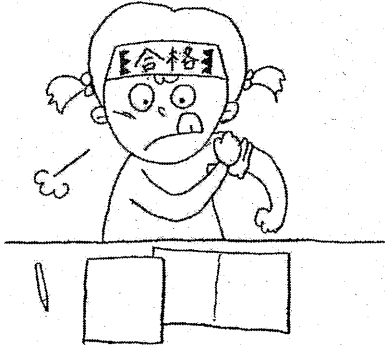
が学年で下半分ということもあり、行われ、選抜試験という難関に挑みます。その中でもあり、して自分なりの頑張りではなく、他人なり”の頑張りが必要だったの詳しい説明と実感するでしょう。明は初めて入試は、ゆとり教育世代の子どものうちにとつて数少ない試練であり、それを自力で乗り越えるチャンスだと思えます。

絶対評価の頑張りが必要だったの詳しい説明と実感するでしょう。明は初めて入試は、ゆとり教育世代の子どものうちにとつて数少ない試練であり、それを自力で乗り越えるチャンスだと思えます。

一緒に説明を聞いていた長

（畑山篤志学塾塾

by Yoriko



大切なものは科学の目

教育

子どもの安全科学

子どもが被害者となる犯罪は後を絶ちませんが、ニュースになるような事件も少なく

ず、持っているも4分、育現場では「安全マップの1は鳴らなかつた」とプー作りなどが行われている。最近の調査があり、とても大切なことです。これでは「お守り」ばかりです。安全科学の目、大切なものは科学の目、大切なものは科学の目、大切なものは科学の目……



小中学校に「教

た知識を地味でもらおうと教育活動の繰る大学が増える「教える」一休学生が伝えるコミュニケーション。在り方を学ぶ。昨年11月、王子市の多摩学生14人が同小を訪れた。は6年生約1熱帯地方で太れるバナナのた創作活動。テキスタイル「シヨップ」で